

## 近現代史(37) アジア諸国の改革と民族運動④「西アジアの民族運動と立憲運動」

○今回のポイント

帝国主義列強の侵略に対し、西アジア諸国はイスラーム教にもとづいて大同団結し、対抗しようというパン=イスラーム主義が起こった。

### (1) パン=イスラーム主義

#### ①パン=イスラーム主義の歴史的背景

■[1. 東方問題]の激化

↓

■西アジア諸国の民衆における[2. 民族的自覚] & イスラーム教徒としての連帯の必要性




↓

■[3. パン=イスラーム主義]が唱えられる。 By[4. アフガーニー]

5. 帝国主義的侵略にさらされたイスラーム諸国の間で 19 世紀後半に大同団結して侵略に対抗しようとして生まれた思想

6. <u>ウラービー=パシヤの乱 (1881~82)</u>	7. <u>タバコ=ボイコット運動(1891)</u>
エジプトに対する外国支配の強化に反対して、軍人アラビーの指導でおきた武装蜂起。「エジプト人のエジプト」を掲げて戦い、エジプト民族運動の出発点となった。しかし鎮圧され事実上イギリスの保護国となった。	[8. <u>カージャール</u> ]朝ペルシャがイギリス商人にタバコの生産・販売などに関する独占権を与えたことに、イランの宗教指導者・商人・民衆が抗議した運動。イランの最初の大規模な抵抗運動で、これ以後イランの民族主義は高まっていく。

#### ②パン=イスラーム主義の思想家たち

	<p>[9. <u>アフガーニー</u>](1838/39~1897) イラン生まれ。各地を旅して「[10. <u>帝国主義に抗するムスリムの団結が必要</u>]」という思想を説く。ムスリム没落の原因を内的な退廃に求め、立憲制・議会制を導入してイスラーム改革をすべきだと主張した。これが各地のイスラーム世界に影響を与えていく。</p>
	<p>[11. <u>ムハンマド・アブドゥフ</u>](1849?~1905)。エジプト出身。アフガーニーの弟子。ウラービー=パシヤの反乱後、エジプトを追放されるが、1888年に帰国。[12. <u>ヨーロッパ近代文明とイスラームが本来は矛盾しない</u>]ことを説き、シャリーアの改革の徹底によるウンマの復興を唱える。イスラーム世界全体に多大な思想的影響を残した。</p>
	<p>[13. <u>ムハンマド・ラシード・リダー</u>](1865-1935)。シリア出身。アフガーニーやアブドゥフとは異なり[14. <u>西欧的価値観</u>]を否定しイスラーム復興運動を唱えた。イスラーム社会が弱体化したのは、スーフィーやウラマーが悪いのだとして、[15. <u>初期イスラーム時代に回帰せよ</u>]と唱える。リダーのイスラーム復興運動は現代のイスラーム原理主義へとつながっていく。</p>

(2)近現代トルコ史

①オスマン帝国の衰退始まる (17世紀後半)

- ・1683年第二次ウィーン包囲失敗→1699年[16. カルロヴィッツ条約]でオーストリアにハンガリーを割譲

②[17. チューリップ]時代 (18世紀前半)

- [18. アフメト3世](1703~30)。対欧宥和政策のもとで西欧文化が流入して文化の爛熟期。

③オスマン帝国改革期

- [19. セリム3世](位1789~1807)

↓  
・「[20. 新制]」と呼ばれる改革…[21. ニザーム=ジェディード]と呼ばれる新式軍を設置するが、既得権益にしがみついたイェニチェリ軍団によりセリム3世は廃位。

- [22. マフムト2世](位1808~39)

↓  
・[23. イェニチェリ]軍団全廃に成功。近代化政策に着手し、帝国の再生を図る。  
←ギリシア独立戦争(1821~29)、第1回エジプト=トルコ戦争(1831~33)、第2回エジプト=トルコ戦争(1830~40)

- [24. アブデュル=メジト1世](位1839~61)

↓  
・第二次エジプト=トルコ戦争中に急逝したマフムト2世を継いで即位。  
・[25. ギュルハネの勅令]をだし、[26. タンジマート](恩恵改革)を開始。  
←クリミア戦争(1853~56)

- [27. アブデュル=ハミト2世](位1876~1909)

- ・1876 [28. ミドハト憲法]…ボスニアでのキリスト教徒虐殺をきっかけに列強がトルコの改革を要求したため、宰相ミドハト=パシャが憲法を制定してムスリムと非ムスリムの平等を保障。
- ・1878 [29. 露土戦争]を契機にミドハト憲法停止。専制を強化  
→オスマン帝国存続の道をパン=イスラーム主義に見出し[30. アフガーニー]を招いて、帝国の一体性を維持するための手段として利用。
- ・1889 「青年トルコ」([31. 統一と進歩委員会])が結成される。アブデュル=ハミト2世によって停止された憲法の復活を目指す。
- ・1908 [32. 青年トルコ革命]→皇帝の専制に対して革命。青年トルコが政権を握った！  
しかし・・・内外の情勢の変化にとまらぬ内閣は反動化し、不安定な政局のもとで国内世論も分裂した。

(3)[33. カージャール朝]ペルシャ(1796~1925)

- 1796 [34. アーガー=ムハンマド]、アフシャール朝に代わったゼンド朝を倒してカージャール朝を建国

↓  
※ペルシャ史：ティムール帝国→サファヴィー朝→アフシャール朝→ゼンド朝→カージャール朝

- 1828 [35. トルコ=マンチャーイ条約]…カージャール朝とロシアの間で締結された不平等条約。カージャール朝はカフカス奪還を目指したが敗北し、アルメニアの大半を割譲し、ロシアに治外法権を認めた。

- 1848~52 [36. バーブ教徒の乱]…カージャール朝の封建的体制と英露の外国勢力に反対したイラン民衆の反乱。バーブ教はサイイド=アリー=ムハンマドが始めたイスラーム教シーア派系の神秘主義的新宗派。反乱とバーブ教は直接関係なかったが、反乱に参加した貧農にはバーブ教徒が多かった。

- 1891 [37. タバコ=ボイコット運動]…カージャール朝がイギリス商人にタバコの生産・販売などに関する独占権を与えたことに、イランの宗教指導者・商人。民衆が抗議した運動。イラン最初の大規模な抵抗運動で、これ以後イラン民族主義は高まっていく。

- 1905 [38. イラン立憲革命]…イギリス・ロシアの侵略とこれに従属する政府に対しておこった立憲運動。1906年仮憲法が制定され、国民議会が創設されたが、イギリス・ロシアの干渉により挫折した。英露は1907年に英露協定を結びイランの勢力範囲を決定した。

- 1925 カージャール朝滅亡…[39. レザー=ハーン]がクーデターで[40. パフレヴィー朝]を創始した。